

# 博士學位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

第 13 号

平成 27 年 4 月

聖心女子大学

## は し が き

本号は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条による公表を目的として、平成27（2015）年2月19日または平成27（2015）年3月14日、本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した甲は聖心女子大学学位規程第5条第1項（いわゆる課程博士）によるものであるものを示す。

## 目 次

氏 名	倉持 長子 (くらもち ながこ) .....	1 頁
学位の種類	博士 (文学)	
学位記の番号	甲第 28 号	
学位授与年月日	平成 27 (2015) 年 2 月 19 日	
学位授与の条件	聖心女子大学学位規程第 5 条第 1 項該当	
審査研究科	聖心女子大学大学院文学研究科	
論文題目	光源氏・浮舟をシテとする能の研究 —— 『源氏物語』 との対比から ——	



氏 名	倉持 長子 (くらもち ながこ)
学位の種類	博士 (文学)
学位記の番号	甲第 28 号
学位授与年月日	平成 27 (2015) 年 2 月 19 日
学位授与の条件	聖心女子大学学位規程第 5 条第 1 項該当
審査研究科	聖心女子大学大学院文学研究科
論文題目	光源氏・浮舟をシテとする能の研究 ——『源氏物語』との対比から——
論文審査委員	(主査) 教授 原 岡 文 子 (副査) 教授 深 沢 了 子 (副査) 教授 松 岡 心 平 (東京大学大学院総合文化研究科)



# 博士学位論文の要旨

## I. 問題と目的

『源氏物語』における宗教的救済は、物語に抱え込まれた中心的主題でありながら、登場人物が誰一人として得ることのできなかつた「絶望的な課題」(張龍妹『源氏物語の救済』序、風間書房、2000年)であると言われる。この宗教的救済の問題を最も重く担って物語に登場する人物は、光源氏と浮舟である。本論文は、光源氏・浮舟をシテとする源氏能〈須磨源氏〉〈浮舟〉〈木霊浮船〉について、『源氏物語』との対比から考察を行うことにより、シテの救済に関わるさまざまな側面を明らかにすることを目的としたものである。

## II. 研究

上記の目的を果たすため、以下の考察を展開した。

### 【序章】

個々の作品の具体的な検討に入る前に、序章では、まず、中世の源氏供養という文化・思想的潮流において、『源氏物語』の作中人物の宗教的救済が目指されつつあったことを検討し、源氏能が創出される背景を考察した。次に、本論文における立場と構成を述べた。本論文は、まず、中世の『源氏物語』受容を踏まえつつも、『源氏物語』本文と〈須磨源氏〉〈浮舟〉〈木霊浮船〉の各作品との対比を詳細に検討するという立場を取る。また、従来の源氏能研究ではあまり顧みられてこなかった、『源氏物語』研究の側から提示されてきた読みの成果を取り入れている。

### 【第一章】

第一章では、『源氏物語』における光源氏と浮舟の宗教的救済をめぐる研究史を概観し、両者がどのように救済を希求しているのか、またいかに救済から遠ざけられているのか、という問題について検討した。

正篇の光源氏については、藤壺との関係から生じた罪障意識によって出家を希求しつつも、一方に藤壺ゆかりの紫の上を中心とした「絆(ほだし)」によってそれを果たせないというジレンマを抱えていることを考察した。光源氏は多くの美質に溢れ、卓越した人間として描かれる一方で、その宗教的救済をめぐる深い苦悩のために、決して人間を超える、その意味で超越的な存在にはなり得ないものとして描かれる。

続篇の浮舟については、出家後に宗教的救済はもたらされるのか、という問題が浮上する。浮舟はその身に刻まれた愛執や女の御身の罪、法華経の龍女成仏の差別構造といった諸要素が障壁となり、宗教的救済から遥かに隔てられていると考えられる。

このような『源氏物語』の光源氏・浮舟のあり方を踏まえたうえで、以下、源氏能においてシテ光源氏・浮舟がどのように救済へと導かれるのかを詳細に考察した。

### 【第二章】

第二章では、光源氏をシテとする能〈須磨源氏〉の考察を行い、従来不可解とされてきた、作品の舞台である「須磨」の意味について解明した。

〈須磨源氏〉の「須磨」は、〈松風〉〈忠度〉〈敦盛〉などの須磨を舞台とする多くの能に見える在原行平・光源氏の流謫の地というイメージよりも、『源氏物語』須磨巻に描かれた、

精進潔斎に励む清らかな光源氏が出現する地としてのイメージを大きく取り込んだものである。〈須磨源氏〉の後シテ光源氏は、こうした須磨で固有の美を放つ光源氏の姿を、中世の「童男」という枠組みによって捉え直したものと考える。この「童男」は、観世音菩薩の三十三変化身の一つであり、中世においては弥勒菩薩と同体視される聖徳太子に象徴されるように、仏法と王法の頂点に立つという、強い聖性を持つ存在である。第一章で考察したような、そもそも『源氏物語』の光源氏が抱えていた罪障意識という重く暗い問題を完全に削ぎ落とす一方で、須磨という地において固有に刻まれた光源氏の清らかな美しさを掬い上げることにより、〈須磨源氏〉のシテ光源氏は人間としての苦悩を遙かに超越した、神仏的な存在として造型し直されたものであると結論付けた。

### 【第三章】

第二章を補うものとして、第三章では、『源氏物語』における須磨の地が固有に指し示す光源氏の王者性について検討した。『源氏物語』の須磨においては、光源氏と「海人」がその甚だしい身分の違いを越え、直接に邂逅していることが注目される。須磨において、「海人」から「貝」を貢進され、共感関係を結ぶ光源氏からは、古代的な王者としての資質を透かし見ることができる。「海人」は、六条院では「鶴飼」に重ねられ、「鷹飼」とともに、改めて光源氏の王者性を証明するものとなっている。『源氏物語』須磨巻の須磨に端を発し、その後も物語において継続される光源氏と「海人」の関わりは、光源氏の王者性を証し立てる一側面としての意味を持つと捉えられる。

### 【第四章】

第四章では、『源氏物語』最後の女君浮舟をシテとする〈浮舟〉を考察した。〈浮舟〉は、従来、『源氏物語』の本格的な理解に基づく作品と見られていたが、『源氏物語』の浮舟と〈浮舟〉のシテ浮舟の間には、初瀬信仰との向き合い方という重大な問題において決定的な異なりが生じている。『源氏物語』では浮舟と初瀬観音の不調和、さらには浮舟による初瀬参詣への拒絶が描かれている。最後に浮舟が辿り着いた信仰の対象は、「阿弥陀仏」であった。一方、〈浮舟〉のシテ浮舟は、天照大神・日吉山王と同体視される中世的な初瀬観音を渴仰し、その靈験によって救済される者として造型し直されている。前場の上ゲ歌やクセについても、従来指摘されているような『源氏物語』の浮舟物語の単純な美化・改変ということではなく、神仏習合観に基づく初瀬信仰を軸に、浮舟物語を構築し直したものであると結論付けた。

### 【第五章】

第五章では、『源氏物語』と〈浮舟〉の異なりをはっきりさせるため、改めて『源氏物語』における浮舟と初瀬観音の関係を詳細に検討した。『源氏物語』で初瀬観音はその靈験による浮舟の婚姻譚を形成しつつあった。しかし、その婚姻譚は、浮舟と周囲の確執によって解体されている。一方、こうした浮舟と周囲の確執の問題は、入水から救出された後の浮舟をめぐる申し子譚・婚姻譚を再び解体する反面、浮舟の出家譚を完成させるという、まことにアイロニカルな結果を導いている。しかし、出家後の浮舟は、初瀬観音の靈験に感じ入ることも、それを信仰の対象とすることもないまま、自らの内面に湧き上がる愛執に苦悶し、そこからの逃避を目指して「阿弥陀仏」に縋ろうとする。浮舟を出家へと導いた初瀬観音の靈験は、物語において最終的に無化されていると言えよう。『源氏物語』において、初瀬観音は浮舟の救い手ではなかった。さらに、浮舟の最後の拠りどころとなった「阿

弥陀仏」でさえも、果たして出家後の彼女の救い手となり得るのか、という大きな疑問を投げ掛けたまま、物語は幕を下ろしてしまう。こうした出家後の浮舟の救済の問題が、〈木霊浮船〉へと引き継がれることになる。

#### 【第六章】

第六章では、従来「拙作」や「術学的」とのみ評されてきた〈木霊浮船〉を『源氏物語』の浮舟像の享受という視座から捉え直した。まず、前シテ浮船の像は、『源氏物語』の浮舟の出生や恋、出家にまつわる深い闇の面を抉り取りつつ造型されていることを指摘した。また、後シテが浮船ではなく、浮船に憑いた物の怪になっていることへの不審についても解明を試みた。〈木霊浮船〉では、シテ浮船も物の怪も、ともに出家者でありながら救済されずに苦悶するという同一の性格を見せる。この後シテのあり方は、出家は果たして救済に結びつくのか、という『源氏物語』の重大な問題を提起するものとして注目されよう。〈木霊浮船〉は、『源氏物語』の浮舟の人生が抱える暗く悲劇的な側面を掬い上げ、浮舟を中心とする出家者の妄執と救済を表現しようとした作品である。〈木霊浮船〉は、中世的な『源氏物語』享受の世界を含み持つ点において、『源氏物語』との多少の異なりを見せつつも、物語の浮舟が抱える本質的な問題を忠実に取り込んで成り立つ作品であると結論付けられる。

#### 【終章】

終章では、以上の章において明らかにされた点を振り返りつつ、残された課題と今後の研究の抱負について述べた。本論文は、『源氏物語』との対比という方法を重視することにより、〈須磨源氏〉〈浮舟〉〈木霊浮船〉の新たな面を浮かび上がらせることができた。その一方で、能作者と『源氏物語』の享受の実態については扱えなかった部分も多く、今後に取り組むべき課題として残されている。

こうした課題も視野に入れつつ、今後は、他の源氏能の作品において、『源氏物語』の登場人物たちの「絶望的」な宗教的救済のありようはどのように取り込まれているのか、またいかに新しい救済の物語が構築されているのか、さらにはその新しい物語に躍動する中世的なダイナミズムとは一体何か、といった問題について、さらに考察を進める予定である。

### Ⅲ. まとめ

本論文は、『源氏物語』においてその宗教的救済が「絶望的」と見なされていた光源氏・浮舟が、源氏能において、どのような新しい救済の物語の主人公として造型し直されたのかを明らかにした。さらにはその新たな物語に、いかなる中世の『源氏物語』享受と宗教的な論理が働いているのかを解明したものである。

## The Study of Noh Appointing Hikarugenji and Ukifune as Protagonists: In Comparison to The Tale of Genji

### Abstract

Religious salvation in *The Tale of Genji*, in spite of being the main subject of this tale, has been described as the “desperate challenge”(by Zhang Longmei *Salvation in The Tale of Genji*, Kazamashobo, 2000) which none of characters achieve. Hikarugenji and Ukifune, these two are exact characters who face the serious task of religious salvation. This dissertation intends to manifest the various dimensions in the Genji-Noh related to salvation of protagonists, in comparison to *The Tale of Genji*. In particular, I will focus on *Suma-Genji*, *Ukifune*, and *Kodama-Ukifune* where Hikarugenji and Ukifune are appointed as protagonists.

Introduction Section begins with the background on the birth of Genji-Noh. Genji-Kuyoh in the Middle Ages, or cultural and ideological phenomenon regarding *The Tale of Genji*, displayed the tendency to aim at religious salvation of the characters in *The Tale of Genji*. Next, I clarify my position and composition in this dissertation. Firstly, it compares the original text of *The Tale of Genji* with *Suma-Genji*, *Ukifune*, and *Kodama-Ukifune*, while medieval comprehension of *The Tale of Genji* is taken into account. Secondly, it also adopts the precedent studies of *The Tale of Genji*. This perspective has not been paid attention to by conventional researchers.

Chapter I overviews the precedent studies on religious salvation of Hikarugenji and Ukifune, and discusses how these two characters aspire after the salvation, and then how they are separated from the salvation.

Hikarugenji gets caught in a dilemma, arising from the compunction about the forbidden relation with Fujitsubo. He has a desire to become a monk, but at the same time, he cannot do so because of the “bond” with Murasaki-no-ue, Fujitsubo’s niece.

With respect to Ukifune, there is an argument over whether her religious salvation can be achieved or not. Ukifune is widely separated from religious salvation owing to a lot of barriers such as her obsessiveness, women’s sinful bodies, and the discriminative structure of Ryu-nyo-Johbutsu in *the Lotus Sutra*. The following chapters deepen the study based on the argument about Hikarugenji and Ukifune in *The Tale of Genji*.

Chapter II explains the reason why *Suma-Genji* places the story in “Suma.” “Suma” in *Matsukaze*, *Tadanori*, and *Atsumori* is presented as a place of exile of Ariwara no Yukihiro and Hikarugenji. On the other hand, “Suma” in *Suma-Genji* gives out the strong image as the place where immaculate Hikarugenji has religious life in the chapter of *Suma*. This distinctively beautiful image of Hikarugenji in chapter of *Suma* is redefined by the medieval conceptual framework “Tohnan,” a manifestation of the Buddha of Compassion, who emits the sacredness.

In order to complement the study of Chapter II, Chapter III examines Hikarugenji’s

character as a monarch which is indicated by the place “Suma” in *The Tale of Genji*. In “Suma” in *The Tale of Genji*, Hikarugenji interacts directly with “Ama” beyond their social statuses each. The image of Hikarugenji in “Suma,” who is not only paid tribute to by “Ama” but also has the power to empathize with “Ama,” reveals his gift as an ancient monarch.

Chapter IV takes up *Ukifune*. In the past, *Ukifune* has been seen as the drama based on a faithful comprehension of *The Tale of Genji*. However, we have to discuss the critical difference on the attitude towards Hase-Kannon between *Ukifune* in *The Tale of Genji* and *Shite of Ukifune*. *The Tale of Genji* shows disharmonious relationship between *Ukifune* and Hase-Kannon, and refusal of pilgrimage to Hase by *Ukifune*. At the end of the tale, *Ukifune* finds “Amitabha Buddha” as her religious anchorage. On the other hand, *Shite* in *Ukifune* gives her unwavering loyalty to Hase-Kannon equated with the Japanese Goddess of the Sun and Hie Sanno. Finally, *Shite* is saved through the miraculous power of Hase-Kannon. *Ukifune* is interpreted as the reconstructed drama of *The Tale of Genji* on the axis of the Medieval faith of Hase-Kannon, based on the syncretization of Shinto with Buddhism.

Chapter V takes the closer look at the relationship between *Ukifune* and Hase-Kannon in *The Tale of Genji*. *The Tale of Genji* has been forming her marital tale by miraculous power of Hase-Kannon. However, the marital tale is disorganized by feud between *Ukifune* and surrounding people. Ironically, this feud accomplishes *Ukifune*’s desire to be a nun. After withdrawing from the real world, *Ukifune* loses her faith in Hase-Kannon all the more. This is because she considers Hase-Kannon to be the Buddha who gives happiness gained in this real world. *Ukifune* agonizes over her obsessiveness, and throws herself on the mercy of “Amitabha Buddha.” In *The Tale of Genji*, Hase-Kannon doesn’t undertake a role of *Ukifune*’s savior. *Ukifune*’s challenge for salvation in *The Tale of Genji* is succeeded by *Kodama-Ukifune*.

*Kodama-Ukifune* has been criticized as the only “poor” or “pedantic” work. Chapter VI reconsiders the value of this drama from the perspective of *Ukifune*’s dark image in *The Tale of Genji*. Firstly, *Kodama-Ukifune* establishes Mae-*Shite*’s (*Ukifune*’s) character, reflecting her negative images of her birth, love, and being in religion. Secondly, the image of Nochi-*Shite* (*Ukifune* or a dead monk haunting *Ukifune*) raises the issue of whether being in religion eventually leads to salvation or not. *Kodama-Ukifune* is the drama that faithfully expresses the aspects of *Ukifune*’s tragic life and her difficulties of being in religion in *The Tale of Genji*.

All these things considered, this dissertation reveals how Hikarugenji and *Ukifune* in *The Tale of Genji* are regenerated as the protagonists in these three salvific dramas. Moreover, this study illustrates how these dramas dynamically show medieval recognition about *The Tale of Genji* and the religious logic in that period.

## 学位申請論文の審査結果の要旨

学位申請者 倉持 長子  
論文題目 光源氏・浮舟をシテとする能の研究  
——『源氏物語』との対比から——  
審査委員 主査：原岡 文子  
副査：深沢 了子  
副査：松岡 心平（東京大学大学院）

### 1. 論文の要旨

シテの鎮魂と救済を大きな課題の一つとする能には、「源氏能」と呼ばれる『源氏物語』に取材する作品群がある。本論文は、『源氏物語』において光源氏と浮舟とが最も重く担う宗教的救済という課題を、三つの源氏能〈須磨源氏〉〈浮舟〉〈木霊浮舟〉（以下能作品については〈〉を付ける表記を用いる）がどう取り込み、具体的にどう作劇したかを読みとく試みである。宗教的救済は、『源氏物語』の中心主題の一つでありながら、すべての登場人物にとって殆ど「絶望的な」課題とされるものであった。本論文は、まず『源氏物語』という作品そのものの救済をめぐる在りようを、光源氏と浮舟に焦点を当てて考察を試み、さらに『源氏物語』本文に常に立ち返りつつ、その絶望的課題を救済へと導く作劇の相を能作品の中に詳細に検証する展開となっている。

具体的な構成概略は以下の通りである。『源氏物語』と能という二つのジャンルを対象とする本論文の研究の立場、方法を明示する序章に始まり、第一章では、とりわけ光源氏と浮舟を中心とする『源氏物語』における宗教的救済の命題が明らかにされる。第二章は「須磨」という場に特に着目しての〈須磨源氏〉論であり、続く第三章は須磨に流離した光源氏の「海人」との関わりを『源氏物語』に辿り直すことにより、光源氏の王者性を確認し、第二章を補強するものとなっている。第四章以下は、浮舟をめぐる論として括られる。第四章においては〈浮舟〉が取り上げられ、『源氏物語』の浮舟との差異、変貌と能の達成が解き明かされる。第五章は、『源氏物語』の浮舟の在りようを初瀬信仰に注目しさらに詳細に辿り直すことで、四章における言及を別の角度から画定する。第六章〈木霊浮舟〉論は、〈浮舟〉においては捨象された『源氏物語』浮舟の「闇」の部分を提示するものとして当該作品を読みとき、これに全体をまとめる終章が付される。

まず序章は、「源氏供養」という中世固有の『源氏物語』享受を踏まえる能〈源氏供養〉が、作者紫式部のみならず作中人物の供養、救済をテーマとする構造を負うことを述べ、光源氏や浮舟といった主人公の救済を語る能の作品成立の基盤を顧みるところから始まる。さらに三作品の研究史を詳細に検討し、それを踏まえつつ中世における『源氏物語』享受の相の考察を深めるとともに、一方これまでどちらかと言えば顧みられることの少なかった『源氏物語』研究の側からの読みの成果を踏まえ、三作品の世界の総合的な読みの更新を図ろうとする本論文の基本的な立場を明らかにする。

第一章は、ひとまず『源氏物語』に照準を合わせ、そもそも『源氏物語』において光源氏と浮舟が、どのように宗教的救済を希求し、にもかかわらずそこから遠ざけられる人物

として描かれているのかを、研究史を辿り直しつつ読み深めるものである。

第二章においては、従来なぜ「須磨」が選取られたのか不可解とされていた〈須磨源氏〉の舞台、場を取り上げ、『源氏物語』の須磨の巻を検討し直すことにより、精進潔斎に励む清らかさを掬い上げ、一方「童男」という中世固有の宗教的枠組みを拠り所にするこゝとで、聖性と王者性に連なるシテが新たに誕生する機構を明らかにした。三章はこうした王者性に関連しての『源氏物語』を対象にする論として付される。

第四章は、従来筋立て等『源氏物語』との濃密な相似がむしろ言及されてきた〈浮舟〉について、新たに両者の差異を初瀬信仰関連の叙述を中心に考究するものである。中世の初瀬信仰をめぐるダイナミズムを基底に、天照大神・日吉山王と団体視される初瀬観音を渴仰するシテ浮舟を新たに誕生させ、兜率天往生という救済に導く能の固有の道筋が究明された。

第五章における『源氏物語』の浮舟物語論は、初瀬信仰をめぐる周囲の人々と確執を深める中で、期待された観音の靈験が無残に解体されていく機構を改めて詳細に検証し、出家しつつも救済とは隔てられた『源氏物語』の最後の女主人公の姿を別決する。

第六章では、これまで拙作として顧みられることの少なかった〈木霊浮舟〉が、『源氏物語』の浮舟の憂愁や闇を負って組み立てられたものとして読み直されている。

## 2. 本論文の評価

本論文について、第一に評価される点は、『源氏物語』と能との本質的な往還を果たすという、新たな試み、研究の領域を拓いたことにある。これまでの源氏能研究においては、中世の『源氏物語』享受の問題をめぐる考察に重点が置かれ、むしろ『源氏物語』自体の読みに立ち返る視点は顧みられることが乏しかったと言える。本論文では、中世の論理、享受の問題考究を十分に踏まえつつ、一方で『源氏物語』本文に立ち返ることで、新たな源氏能の読みを拓いた点がまことに斬新である。その意味で『源氏物語』と能との往還をめぐる優れた達成、と呼ぶことができよう。

第二には、極めて周到な調査、検証、論の展開が図られている点である。第四章を例に挙げるなら、初瀬信仰をめぐる『源氏物語』と能との差異をまず詳細に提示した上で、〈浮舟〉を支える中世の宗教思想の様相を、『長谷寺縁起文』『長谷寺験記』『連珠合璧集』等様々な資料に基づき、極めて実証的に検証し、能における浮舟救済の達成を明らかにする過程は説得力に富む。

第三に評価される点としては、注の整備、周到な論文構成、個々の表現の完成度の高さ等が挙げられよう。

問題点としては、救済、罪、という図式に囚われるあまり、例えば光源氏の恋の原点とも言うべき母桐壺更衣への思い、といった命題への目配りが欠けるなど、『源氏物語』そのものの読みをもう少し豊かな視点から試みるべきではないか、また源氏寄合のさらなる調査の求められる箇所など、章によってはやや荒削りな部分も見える、あるいはまた源氏供養の問題をはじめさらなる考察を求めたい部分も残る、等が指摘された。ただし今後の課題ともなるべきこうした問題点はいずれも決して全体の評価を下げるものではなく、清新な視点からの源氏能研究として、学界に寄与するところも多く、学位論文として充分高く評価できるものにほかならない。

### 3. 本論文の審査の過程

本論文は平成 26 年 10 月 29 日に提出された。同年 10 月 30 日に学長より審査の付託がなされ、同年 11 月 11 日より、大学院委員会承認による 3 名（内 1 名は学外審査委員）から成る審査委員会が審査を開始した。平成 27 年 1 月 20 日には、博士学位申請論文公開審査会および最終試験が実施された。なおこの日までに計 3 回の審査委員会を開き、慎重な審査を重ねている。

審査委員会では、『源氏物語』研究を見据えつつ、中世の『源氏物語』享受に広く目を向ける源氏能研究の切り口の新鮮さ、研究史を踏まえる周到な検証過程、成果の独創性など、完成度の高い論の展開が評価された。学位論文として充分評価できることが確認されている。

博士学位論文  
内容の要旨および審査結果の要旨  
第13号

平成27(2015)年4月25日発行

発行 聖心女子大学大学院  
編集 聖心女子大学大学院  
〒150-8938  
東京都渋谷区広尾4-3-1  
電話 03-3407-5811 (代表)